エクスカーションとシンポジウム

ミュージアムからはじまる共感の文化圏
ゆっくり、じっくり、草の根のスロー・ミュージアム論

深刻な人口減少が危惧される日本のさまざまな地域で、
ミュージアムやそのコレクションの意義・価値が
改めて問い直される動きが進んでいる。
それは、地域の縮小に伴う行政サービスの質の低下や
コストの削減といった後ろ向きの議論だけではなく、
より前向きに、いま、この地域に本当に必要なミュージアムの
在り方を探るチャンスにもなっているように思われる。
地域のために、人びとの幸福のために、ミュージアムには何ができるのか。
エクスカーション、レクチャー、シンポジウムを通して再考する。

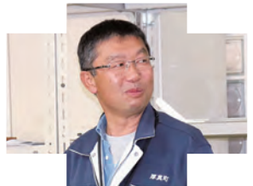
日時／ 2023年9月2日（土）11:00〜16:30
会場／ 夕張市拠点複合施設りすた 多目的ホール
※Zoomを用いたオンライン配信を併用（シンポジウムのみ）
パネリスト／ 岡部兼芳（はじまりの美術館 館長）
髙橋麻衣（八戸市美術館 学芸員）
山口一樹（夕張市教育委員会 学芸員）
司会・コーディネーター／ 今村信隆（北海道大学文学研究院 准教授）
参加者のべ47名（オンライン配信、事後配信視聴者を含む）

記録と記憶

記録と記憶
ー地域を活かすコミュニティ・アーカイブ

災害に見舞われた後、〈外から〉あるいは〈上から〉の復興支援が
大きな力をもつことは確かである。
しかし同時に、たとえば地域資料の地道な収集・保存・活用から
ひろがっていくような、〈内から〉〈下から〉の
地域文化の掘り起こしも重要になってくることは間違いない。
このような分野において、コレクションを預かる
ミュージアムやその関係者には何ができるのか。
2018年9月の北海道胆振東部地震で被災した厚真町の事例に学び、
キーパーソンの方々にお話をうかがいながら、議論を深めたい。

日時／ 2023年10月14日（土）13:00〜17:00
会場／厚真町軽舞遺跡調査整理事務所
※Zoomを用いたオンライン配信を併用（シンポジウムのみ）
パネリスト／ 定池祐季（東北学院大学 准教授）
乾哲也（厚真町教育委員会 学芸員）
奈良智法（厚真町教育委員会 学芸員）
西村勇太（一般社団法人 Wellbe Design）
司会・コーディネーター／ 今村信隆（北海道大学文学研究院 准教授）
参加者のべ39名（オンライン配信、事後配信視聴者を含む）



ミュージアム「未満」としてではなく、ミュージアムの「原点」として考える

今村 信隆（北海道大学文学研究院准教授）

ミュージアムのなかで、あるいはミュージアムに関連する業界のなかで仕事をしていると、しばしば、個々の館園のあいだに横たわる、目には見えない「序列」の存在を感じることがある。この序列にはいくつかのヴァリエーションがあるが、基本的な構造はいつも変わらない。つまり、最も中心にあるものが一番「偉い」、いわば頂点であり、そこから離れるに従って次第に地位が低下していくというヒエラルキー型の構造になっているのである。

このような序列の中心・頂点には、たとえば、大都市圏（とりわけ首都圏）の大規模ミュージアムが入る。その場合、大都市圏から離れるほど、そして館の規模（たとえば予算や入館者数の規模）が小さくなるほど、そのミュージアムは周縁ないしは低位に置かれることになる。あるいは、国が主導するいわゆるナショナル・ミュージアムは、どこの国でも、その国のミュージアム界をリードする存在であることは間違いない。日本ではかつての国立館もすでに独立行政法人化されているが、それでもこれらの館が今もってミュージアム界のピラミッドの最上位を占めていることは確かである。その下に、都道府県立のミュージアムが置かれ、さらにその下に市町村立のミュージアムが位置するというイメージだ。加えて法律の上では、「登録博物館」、博物館に相当するものとして指定される「指定施設」、そしてそれ以外の施設という区分もある。令和4年度の博物館法改正によってやや修正されてはいるものの、お墨付きを与えられた正式な登録博物館を中心として、その周囲にその他の施設が続くという構造自体は変わっていないといえるだろう。

もちろん、ミュージアムの世界に存在するこのような序列の構造自体が直ちに問題だなどと言いたいわけではない。序列やヒエラルキーと表現してしまうと印象がよろしくないかもしれないが、中心と周縁の区別が存在すること自体は、ある意味、合理的ですらあるだろう。たとえば大規模な災害や感染症などが社会を脅かすとき、「中心」から「周縁」へと、専門的な知見や技術、情報や物資が融通されることが奏功する場合も少なくない。あるいはそのような非常事態ではなくても、一部の館園がミュージアム間のネットワークのハブとなり、リーダーシップを発揮することは理に適っている。

ただ、もしも、いわゆる「周縁」のミュージアムが、ヒエラルキーの上部に位置しているミュージアムよりも価値が低いものとして見下されることになるのならば、それはいささか問題であるだろう。ミュージアムの世界に横たわっている目に見えない序列の中では、たとえば、小規模な地方自治体が運営している、「登録博物館」でも「指定施設」でもないような曖昧な立ち位置の施設は、下位に置かれてしまうかもしれない。しかしながら、そのような小さな施設で日々生じている出来事が、大都市の大規模ミュージアムで生じている出来事よりも価値において常に劣っているなどということが、はたしてあるだろうか。というよりも、大規模でも派手でもない小さなミュージアムの小さな積み重ねこそが、実は、人や街との関係を再考し始めたミュージアムにとっての最前線の現場なのではないか。わたしたちはそのような出来事を見過ごさず、過小評価せず、むしろそうした草の根の活動からミュージアムを考え直していくべきではないのか。ここで報告する２つのイベントは、このような思いを背景として企画されたものにほかならない。

「ミュージアムからはじまる共感の文化圏」は、北海道夕張市の拠点複合施設りすたを会場として行われた。このイベントの背景として先に述べておく必要があるのは、開催地となった夕張市が、深刻な人口減少と債務超過に悩まされた末、2007年に全国の自治体で初の財政再建団体に移行しているということである。そうした流れの中で、かつて存在していた旧夕張市美術館も、2012年に閉館を余儀なくされている。しかもこの旧美術館は、積雪の重みで建物の屋根が損壊し、そのまま再開を断念せざるを得なくなるという、大変辛い終わりを迎えているのである。その後、2022年8月に新しい拠点複合施設として「りすた」が誕生した。狭義の美術館ではないものの、この新しい施設では、旧夕張市美術館のコレクションを用いた待望の展覧会も開催されている。わたしたちは、今回ここで、イベントを実施させていただいた。

イベントは、夕張市教育委員会学芸員の山口一樹氏の案内によるエクスカーションからはじまった。見学先は、旧夕張市美術館のコレクションを収蔵している某施設と、拠点複合施設りすたの２か所である。最初に訪れた某施設では、旧夕張市美術館で館長を務めていた上木和正氏が飛び入りで参加して下さり、さまざまな裏話をお聞きすることができた。収蔵環境は、美術館の一般的な基準に照らして必ずしも最良とは言い難いかもしれないが、それでも地域の大切な宝として、作品たちが可能な限りケアされていたことが印象的であった。

後半のシンポジウムでは、３人のパネリストをお迎えして、レクチャーとディスカッションを行った。はじまりの美術館（福島県猪苗代町）館長の岡部兼芳氏は、障害がある人の表現を軸に活動してきた同館の活動を紹介してくださった。はじまりの美術館は、美術館をつくろうという行政の動きから出発したミュージアムではない。美術館の土台となったのは、そうではなくて、半世紀以上にわたって知的な障害のある方の支援事業を行ってきた社会福祉法人安積愛育園の活動である。障害のある方の創作活動支援を続けるなかで、次第に、出来上がった作品をもっと多くの人に見てもらえないかという機運が高まっていく。大規模な海外展への参加や、国内外の動きとも連動しながら、紆余曲折を経て、2014年にはじまりの美術館がオープンした。母体となっている安積愛育園の基本理念は、「だれもが安心して暮らせるまちづくり」、「一人ひとりが望む生活と自己実現」だという。こうした理念は、自然なかたちで、はじまりの美術館にもフィットしているようである。

そもそも、障害とアートは、縁遠いもののように見えながら、実は似ているのではないかと岡部氏は提言する。両者とも、どこか近寄りがたいイメージをもっているかもしれない。恐れや拒絶の対象になることもある。けれども

本当は、障害もアートも特別なものではなく、わたしたちの身近に、あるいはそれどころかわたしたちの中にさえあるものではないか、と岡部氏は問いかける。障害も、アートも、新しい発見や発想をもたらしてくれる可能性を持っている。それを、自分とは無関係なものとして遠ざけるのは「もったいない」。そう指摘しながら岡部氏は、障害やアートを過度に特別視しない、日常とも地続きの美術館の活動について教えてくださった。

たとえば、同館の前庭で行われるイベント「はじまるしぇ」では、お店やワークショップのブースが縁日のように並び、美術や福祉に関心がない人たちも気軽に訪れる。あるいは、住民が得意なことを活かしあう「オハコの会」では、折り紙講座や料理教室から、美術館裏手にひろがる墓地を背景とした怪談話の会まで、多彩なラインナップが興味深い。開館前から続いてきたという「寄り合い」では、美術館が生きた場所になるように、茶飲み話をする感覚での語らいが重視されている。素人が美術館をつくっているような感覚で、手探りで運営してきたと述べる岡部氏だが、それでも10年近い活動を振り返ってみると、自分たちは「場づくり」を行ってきたのだという実感があるとも述べている。地域に、正解としての美術館を押し付けるのではない。美術館らしさに縛られすぎない柔軟な発想が、猪苗代という地域に合った、新しい美術館のかたちにつながっている。

2021年11月にオープンしたばかりの八戸市美術館の学芸員・髙橋麻衣氏からは、作品という「もの」だけでなく、「ひと」や「こと」を重視する同館の取り組みについて教えていただいた。八戸市には元々、1986年に開館した美術館が存在していた。それに替わる施設として新たに建築され、2021年11月に「再開館」というかたちでオープンしたのが現在の八戸市美術館である。アートをまちづくりの軸の一つに据えてきた八戸市の美術館として、「種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館」、「出会いと学びのアートファーム」ということを基本コンセプトとしているのだという。

八戸市美術館の活動の特色は、全国的にも注目を集めているその建築によくあらわれている。ここでは、作品という「もの」だけでなく、「ひと」や「こと」も大いに重視されていることが一目瞭然だ。確かに、メインの企画展示室である「ホワイトキューブ」、映像展示等を行う「ブラックキューブ」、所蔵品を紹介する「コレクションラボ」等では作品に重きが置かれている。だが、ワークショップルーム、スタジオ、アトリエなどの各部屋や、何より「ジャイアントルーム」と名づけられたエントランスホールを兼ねる巨大な空間では、「ひと」と「こと」とが主役に躍り出ている。

髙橋氏は、これらの部屋の活用のされ方を中心に、同館の思想と実践について教えてくださった。鍵となるのは、完成された「もの」を並べる展示の機能だけではなく、動き続ける「こと」としての、あるいは「ひと」のための場としてのミュージアムの姿である。たとえば、会場の出口に担当学芸員が居て、学芸員とおしゃべりをすることができる

企画展がある。あるいは、お酒を飲み、ほろよい気分で作品をみて語り合うイベントが行われる。また、とりわけジャイアントルームは、これまでの美術館の常識を柔らかく解きほぐすような、さまざまな「こと」が起こる場でもある。トークイベントやプロジェクトのためのミーティング用のスペースになる。かと思えば小学生の作品展やパフォーマンスの会場になる。はたまた「ジャイアント食堂」というイベントでは、絵画作品が置かれたこの空間が仮設の食堂に早変わりし、ビンゴ大会で盛り上がり、地元のアイドルのライブや来場者によるカラオケが歌声を響かせる。

地域との協働も欠かせない。八戸市美術館では、「ボランティア」ではなく、「アートファーマー」や「共創パートナー」と呼ばれる人や団体が活躍しているそうである。アートファーマーは、アーティストとともに様々なプロジェクトに主体的に参画し、実践していく。共創パートナーは地元の大学などの団体を指し、たとえば八戸学院大学保育学科による託児室の運営などが試みられたという。さらに、有志を中心とした学校連携プロジェクトチームでは、小学校、中学校、高校の教員が協働し、小中高の児童・生徒が一緒に行う合同鑑賞会などの活動を行っている。いずれも、新しい美術館の勢いとエネルギーが感じられる動きだと言えるだろう。

髙橋氏は、20万人規模の市の美術館であれば、人の顔、地域の顔がよく見えるという。このサイズだからこそできる丁寧な関係性を築いていくことが、今後も重要だと話してくださった。

最後に登壇した夕張市教育委員会の学芸員・山口一樹氏は、夕張市拠点複合施設りすたで自らが担当した展覧会「旧夕張市美術館所蔵作品展」を中心に報告してくださった。2022年8月と2023年8月の2回にわたって開催されてきた同展では、旧美術館の閉館後、市内某所に収蔵されて日の目をみることが難しかった美術作品が、施設内に所狭しと展示されていた。それだけでも十分に意義深いのだが、さらに特筆すべきは、このとき山口氏が来館者との対話を積極的に試みるための仕掛けを設けていたことだ。会期中、山口氏は、会場の出口付近に対話のためのブースを設けて常駐し、来館者に積極的に声をかけながら、さまざまな人の話に耳を傾けたのである。

来館者の語りには、個人的な想いやエピソードが溢れている。たとえば、かつての旧美術館で同級生が働いていたという人は、美術館は「安心できる場所」であったと述懐する。出品作家の息子だという人物は、父が残したものに想いを馳せ、自分の人生を振り返る。自らの芸術上の恩師の作品を観に来た人は、作品をみて、先生の教えを確かめる。亡くなった恩人の墓参のために夕張を訪れていた人は、恩人が生きた街として、夕張の風景画に思い出を重ねていく。これらはいずれも、山口氏との対話のなかで、少しずつ言葉になっていったエピソードやストーリーである。こうしたインタビューを経て山口氏は、すぐに言葉にならないイメージのなかに、実は重要な想いがあるのではないかと指摘する。対話のなかでは多くの来館者たちが、「えーと」、「あのー」と言葉につまり、まだ言葉にならない想いを探り当てようと模索していたという。そうした、完璧なことばにならない部分を汲み取りあい、想像しあうことが、共感のなかでもとりわけ重要な、共に生きている感じ（共生感）に

つながるのではないかと山口氏は示唆してくださった。

コレクションの価値を決めるのは、学術的な、あるいは普遍的な観点だけではない。そうではなくて、来館者が見出す極めて個人的な意味のなかにも、コレクションの価値はあるのではないか。そのように語る山口氏は、一見したところミュージアムには見えないかもしれないこの場所が、人びとが意味や想いを寄せ合う場として、確かに１つのミュージアムでありうるのだとも述べていた。

２つ目のイベント「記録と記憶−地域を活かすコミュニティ・アーカイヴ」は、北海道厚真町の軽舞遺跡調査整理事務所を会場として行われた。厚真町は5年前、2018年9月6日の北海道胆振東部地震によって被災し、人的な犠牲を含む大きな被害をこうむった地域である。軽舞遺跡調査整理事務所は、狭義のミュージアムではないが、この地域で史資料の整理・研究・活用を中心とした活動を行ってきた。また、災害のために持ち主を無くした地域資料をボランティアが主体となって整理し、記録する活動も、ここを拠点として進みつつある。

イベントではまず、厚真町教育委員会学芸員の乾哲也氏から、施設の概要や、被災時の状況についてレクチャーを受けた後、エクスカーションとして施設見学を行った。エクスカーションでは、乾氏に加えて、同じく厚真町の奈良智法学芸員にも参加していただきながら、資料を中心とした活動について学ぶことができた。かつて小学校だった建物を転用した軽舞遺跡調査整理事務所は、立派な展示室や収蔵庫を具備した、殿堂のようなミュージアムではない。しかし、収蔵と展示の両方の機能を兼ねた、いわゆる収蔵展示の方式で多大な資料を管理するこの場所は、通常の展示室ではなかなか出会うことができない魅力にあふれている。収蔵資料は約12000点にも及ぶという。もちろん、ただ保管されているだけではない。地域の中学生などが授業で活用したり、あるいは里帰りの際に子どもを連れて来る厚真町出身者もいたりするという。ガラスケースなどはなく、すべての資料に手を触れることができる。一般に、ミュージアムに収められた資料は、「公的」なものとして、私的な思い入れをいわば漂白してしまうことが少なくないが、ここではまだ地域の人たちが資料を自分たちのものだととらえているように感じられた。参加して下さった東北学院大学准教授の定池祐季氏の言葉を借りるならば、まさに「軽舞ワンダーランド」といった趣きである。

また、エクスカーションでは、地域住民による資料の整理・保存活動を指導している西村勇太氏から、その活動について詳しく教えていただくこともできた。この活動で扱われているのは、主に、地震によって特に大きな被害を受けた地域から寄せられた文書や写真である。これらのものをそのまま放置しておくと、そこに生きてきた人びとの記録や記憶が、集落ごと、消え去ってしまいかねない。そこで、ボランティアとして集まった地域住民たちが、モノについて語り合いながら、残すべき資料として整理する活動を行っている。このような活動は、保存するべきコレクションがゆっくりと時間をかけて生まれくる現場であり、かつ、地域住民が自分たちの傷を癒すための実践でもあるだろう。

次いで、北海道の厚真町をはじめ、さまざまな被災地に寄り添って活動を続けてきた東北学院大学准教授の定池祐季氏にご講演をいただいた。災害社会学者を専門とする定池氏は、北海道胆振東部地震の発生前から、厚真町と関わってきたという。2012年に職員研修の講師としての依頼を受けたことをきっかけに、2013年から町の防災教育に本格的に関わり始め、さらに2014年からは厚真町の防災アドバイザーを務めるに至っている。胆振東部地震の発生時には、早くも翌々日から厚真町に入って支援を開始したが、そのときにも、町の広報紙などを通じてすでに定池氏のことを知っている町民の方が多数おられたそうである。

レクチャーの中で印象的であったのは、歴史の中のある一時点で発生する災害の、「前後」が実は重要だという点である。たとえば定池氏は、災害の際に社会のひずみが可視化され、脆弱な面が暴かれるのだと述べていた。つまり、災害が社会に衝撃を与えるより前に、社会はすでに、ひずみを抱えているのである。障害をかかえているために避難所に入りにくい。アレルギーや疾病をかかえているために避難生活で困難に直面する。そのような事例が数多く存在するのだという。災害があぶり出すのは、こうした弱者やマイノリティが普段から排除や隔離の対象になっているという社会の現実にほかならない。

また、教育や文化という、本来的に長い時間を要する営みも、災害の前では脆弱なものの１つである。全国の様々な事例をみてきた定池氏は、災害時には、学芸員等の文化施設の担当者であっても、避難所の運営といった非日常的な業務にあたらざるをえないケースが多いと指摘する。とりわけ大きな災害であれば、文化施設の復旧の優先度は下がる。このような時に重要になってくるのは、学芸員の仕事を理解している人、地域の歴史・文化の大切さを知っている人が地域にどれだけいるかだと定池氏は強調していた。被災したモノが資料として救出され活用されるのか、それとも、単なる災害ごみとして廃棄されるか。その明暗を分けるのは、資料の大切さを知る人がどれだけいるか、そして、普段から、地域の学芸員や司書といった専門職に相談できるつながりを持てているかであるという。

自身も1993年に発生した北海道南西沖地震で被災した経験を持つ定池氏の講演は、地域の記憶・記録をつないでいくことの重要さと困難さの両方を、リアリティをもって教えてくれるものであった。

２つのイベントの会場となったのは、小さな市町村の、登録博物館でも指定施設でもない施設である。このような施設は、通常のミュージアムの序列のなかでは、ともすれば「ミュージアム未満」だとして閑却されてしまうかもしれない。それらは、出来ればミュージアムになりたかったけれども叶わなかった、曖昧な施設だと見なされてしまうかもしれない。

しかし、本当は、そうではない。そこにあるのはミュージアム未満の未成熟な取り組みではなく、むしろ、ミュージアムのプロトタイプのような、ミュージアムの原点のような、言いようのないエネルギーに満ちた活動なのである。既存のミュージアムの型にはまらないかもしれないが、にもかかわらず魅力的で有意義な試みが全国各地には少なからず存在している。そのことをわたしたちは、2023年度に実施したプラス・ミュージアム・プログラムの２つのイベントを通じて改めて痛感することが出来た。